



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	環境教育を担う人材育成に関する研究：中日の自然体験学習を事例として[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	游, 瀟
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第13940号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77996
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	You_xiao_review.pdf, 審査の要旨



学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称 博士（農学）

氏名 游 瀟

審査担当者 主査 教 授 柿澤 宏昭

副査 教 授 中村 太士

副査 准教授 愛甲 哲也

副査 准教授 庄子 康

学 位 論 文 題 名

環境教育を担う人材育成に関する研究

－中日の自然体験学習を事例として－

本論文は、図 1、表 7 を含む総頁数 91 頁の和文論文であり、他に参考論文 1 編が添えられている。

1980 年代に「持続可能な開発のための教育（ESD）」が重要な課題として設定され、この中で自然体験学習に重要な位置づけが与えられた。日本は自然学校を中心として国際的に先導的な自然体験学習の実践を展開している一方、世界最大の人口をもち経済発展が著しい中国では自然体験学習の展開は発展途上にあり、持続可能な社会構築のため、その普及が大きな課題となっている。また、自然体験学習を担う人材の育成が重要な課題であるが、これまでの環境教育研究においてほとんど研究されてこなかった。

そこで本研究では日本と中国を対象とし、自然体験学習の展開過程と担い手の活動を明らかにし、両国を比較しながら自然体験学習の担い手育成のあり方について検討を行い、中国における担い手育成の方向性を提示することを目的とした。研究は聞き取り調査と文献資料調査によって行った。

日本の自然体験学習については北海道の木育を対象として分析を行った。木育は自然学校の成果を基礎としてプログラムが作成されており、自然体験学習の最先端の取り組みと位置付けられた。

木育の展開過程では、幅広い内容の木育を実現するためにコーディネート能力を持った木育マイスターの育成と人的ネットワークの構築を進めた。このため、木育マイスターはネットワークを生かして活動していることが特徴として指摘できた。

木育マイスターは 2 つのタイプに区分できた。タイプ 1 はコーディネート機能を持ち、ネットワークを生かして多様な講師によってプログラムを実行し、タイプ 2 はネットワーク情報を活用して独立してプログラムを実行していた。また木育マイスターには多様な専門性を持った者がおり、新たな木育プロ

グラムの創出に重要な貢献を行っていた。

木育マイスターは木育の理念を具現化しつつあるが、それを可能とさせた要因として、第1に木育の立ち上げメンバーが木育に関わり続け当初の理念を維持できたこと、第2に木育を幅広く定義したことで多様な専門性を持った人を巻き込んだこと、第3に木育マイスターのコーディネート機能とネットワークを重視したこと等が指摘できた。

中国の自然体験学習については「自然の友・ガイア自然学校」による自然体験学習とその担い手である自然体験師の取り組みを研究対象とした。

政府による知識普及型の環境教育の限界を認識したことから、自然の友・ガイア自然学校が自然体験学習を展開し、その担い手として自然体験師を育成した。育成にあたっては、自発的な学びを促す内容を重視し、自然体験師の自発的な活動展開に貢献していた。

自然体験師研修が当初自然の友・ガイア自然学校のスタッフ育成を目指したため、自然体験師の多くは自然学校の講師を勤めていたが、近年自らプログラムを開発し実施する動きも出てきた。また、地域で独自のプログラムを展開したり、地域での人材育成の機能を果たす自然体験師も現れていた。

上記のように自然体験師が活発な活動を展開しつつある要因として、第1に自然の友・ガイア自然学校がフォローアップ研修等を提供して自然体験師の自発的な取り組みを支えていること、第2に地域における担い手育成促進のために、人材育成機能を持つ分校を立ち上げ、地域の人材育成とネットワーク形成に取り組むつつあることが指摘できた。

以上の中日両国の取り組みから、共通して指摘できる自然体験学習の人材育成の方向性は、第1に自発的な取り組み促進と教育実践機会の提供、第2に担い手によるネットワークの形成、第3に育成した人材に対する継続的支援、第4に多様な分野の人材の巻き込みによる自然体験プログラムの豊富化であることを明らかにした。

また中国の人材育成は日本と比較して、コーディネート能力をもつ人材の脆弱さ、ネットワークの広がりやの欠如が課題であることを指摘し、今後の担い手育成の方向性として、第1に担い手研修カリキュラムにコーディネート能力育成を組み込むこと、第2に担い手へのフォローアップを強化すること、第3に他の自然体験学習に取り組む組織や自治体へネットワークを広げることを提示した。

以上のように本論文は、自然体験学習を担う人材育成のために必要な条件について明らかにするとともに、今後の中国における人材育成の方向性を提示した。これら知見は、自然体験学習の展開と担い手育成を進めることに大きく寄与するものであり、その成果は学術・応用両面から高く評価される。よって審査員一同は、游瀟が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格があるものと認めた。